赤い傘

唯人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
赤い傘

【Ｎコード】
Ｎ２４６８Ｖ

【作者名】
唯人

【あらすじ】
不倫の行く末は……。改稿しました。

灰色に濁る街の雑踏を、赤い傘を差し、寄り添うように肩を並べ歩く二人がいた。
急ぎ足で目的地へ向かう人々の中、二人の姿は誰からも見咎められる事もなく、霧がかかったような滲んだ景色へと溶けてく。交わす言葉は、行き交う人々のざわめきと、傘を叩く雨音に紛れて消えていく。
陽の差さぬ空の下、赤い傘に守られた小さな空間だけが、二人の居場所だった。

相合傘をして喜ぶような歳でもないし、彼を困らせようと思った訳でもない。
古びたアパートの玄関先に置かれた傘立てにあったのは、数ヶ月前にコンビニエンスストアで買ったビニール傘と、スーパーで買い求めた一本千円のベージュの折りたたみ傘、そして数年前にデパートで買った、真っ赤で大振りの傘だけだった。
「俺はこのビニール傘でいいから、お前はその傘を使えよ」
銜え煙草の彼は、当たり前のようにビニール傘に手を伸ばした。
「こういう類の傘、ってすぐに盗まれたり置き忘れてしまったりするんだよな」
僅かに開いた玄関扉の外からは、地面を激しく叩く雨音が響いている。
「雨の日くらい一緒に並んで歩きたいんだけど、嫌？」
赤い傘の柄を掴み、遠慮がちに彼の顔を見上げた。
彼は少し当惑したように眉を上げた。
「そうだな。そうだよな」
長い指が私の額を優しく撫でる。「ごめん。気が利かなくて」
「そんな言い方しないで」

私は首を振った。「ご免なさい、我儘ばかりで」
次の言葉を探し、俯いた私は、あるいは涙目だったかもしれない。
「心配するなよ」
傘立てにビニール傘を戻した彼の両手が私の肩にまわった。「また会えるから、そんな顔するなよ」
「……でも」
すがるように彼の胸に顔を埋めた。煙草の灰が玄関の三和土(たたき)に落ちる。体温を感じるシャツから、煙草の匂いと僅かに甘く切ない香りがした。それは情事のあとの残滓(ざんし)にも似ていた。
「愛しているよ」
彼の囁く声が耳元で響く。
「私も愛してる。だから何処にも行かないで」
彼の腰を抱く両腕に力を込めた。そう、あなたを何処にも行かせたくはない。
あなたの戻る場所はここなのだ、と年端もいかぬ子供のように泣いて喚いて叫びたかった。
だけど私にそんな勇気はなかった。嫌われたくなかった。たとえ都合のいい女だと思われても、この身体を抱く匂いに包まれていたい。ただそれだけだった。
「もう時間だから」
彼の吐息が唇に絡みつく。私は黙って頷いた。

雨の日はいい。
傘を手に道行く人たちは、互いにその表情を窺う事もなく、ただ黙々とそれぞれの目的地に向かって進む。
私は彼の左腕に絡みつくように歩いた。赤く華やぐ色が二人の頭上で揺れ動く。
どうして、この人には家族がいるのだろう。どうしてもっと早く、この人に逢えなかったのだろう。
それとも、誰か他の人の事を、彼を想うように愛していたのだろ

うか。彼のいないところで、私は「幸せ」といえる人生を送っていたのだろうか。
彼と他愛のない言葉を交わし合いながら、自問自答を繰り返した。
「また会える日、って何時なの」
思わず口に付いて出た。彼の瞳が私を見返す。両の瞼から溢れる涙。
彼は私の腕を振りほどくと、この身体を抱き寄せた。
「何時だって、逢いにくるよ。だから待っていて」
「ずっと一緒にいたいのに。いつもこんな風に抱いていて欲しいのに」
苦しい程強く抱かれる力に、涙が溢れた。声が震えた。
私に都合のいい女など演じきれない。そんな女と思って欲しくない。
彼を見送らなければならない駅はもう目の前だった。
「離さないで」
「離れるものか」
色とりどりの傘の波の中、人目も憚らず固く抱き合い、最後の口付けを交わした。
そう、それが最後のキスだった。

彼の乗る列車がもうすぐ到着する。私たちはプラットホームで黙って手を繋いでいた。絡んだ指先が、爪が、互いの肌を傷付け合う。自分がいた痕跡を忘れさせぬように、深く、鋭く。
それは破瓜よりもはるかに心地のいい痛みだった。
雨に煙る街は、海に沈む難破船のように色を失っていた。目の前のビルも、人混みも、この傘の色さえも。
「愛しているわ」
迫りゆく列車の音に掻き消される声。
振り向いた彼の顔。「俺も……」
――何処にも行かないで。ずっと一緒にいて欲しいの――

「俺もお前が……」
互いの指が離れ、線路に背中を向けた彼の胸を、両手で思い切り突き飛ばした。
「なっ……」
長い指先がゆっくりと宙に舞い、大きく見開かれた瞳は私を凝視したまま、静かに線路の中に吸い込まれていく。
「愛していたわ。今までも、これからも」
傘を投げ出し、鈍色の線路に横たわる彼の身体の上に飛び重なった。
耳を劈(つんざ)く列車のブレーキ音。誰かの叫び声。
もう、何も聞こえない。

色を取り戻した赤い血は、蒼い雨に流される。
細かく砕かれ、初めて混じり合う二つの身体。

驚愕と喧騒の中、持ち主を失った赤い傘は、雨に晒され、人々に踏みつけられ、ただ地面を転がり続け、やがてその形を失った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2468v/

赤い傘

2011年7月27日04時57分発行